

医療安全とメディエーション

1. 医療安全とメディエーション

1) 医療メディエーションとは

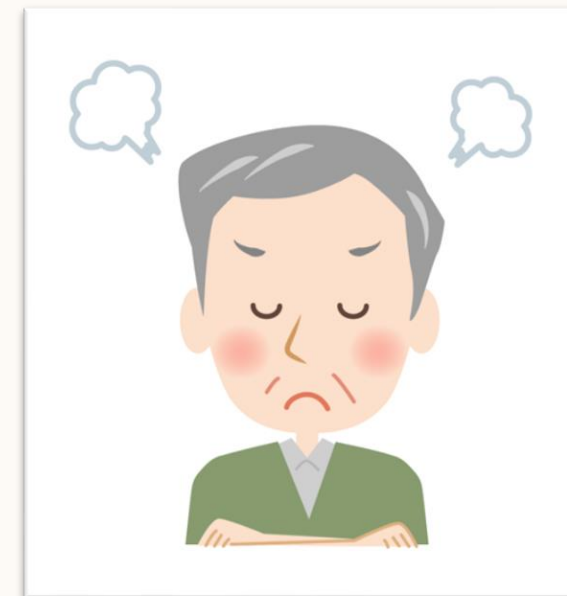
事故後の正直な説明の過程が、患者と医療者の間で共有されていくように支援するモデル

事故直後の混乱したなかでの対応の場面

真摯な医学的検証に基づくその後の説明の場面

それを踏まえ関係再構築へ向けて方向性を見出していく場面

様々な事故後の場面で、医療メディエーターの役割が重要な意味を持つ



具体例として

術中に患者が予期しない形で死亡する事故



「大変なことになった！！なんとかしなくては！！」
「これからどうなってしまうのだろう」
「自分が遺族の前に立つわけにはいかない、何が起こったかを説明するのが医師の責務であり、そのため遺族の前では、自身の心の乱れを可能な限り抑制し、誠実に冷静に説明しよう」

誠実さが遺族側に伝わらず、かえって医師に不信を持たせてしまう可能性がある

「この医者は、人が一人死んでいるのに、どうしてこんなに冷静に淡々と話せるの？！
亡くなった私の家族をひとりの人間として大切に診ていなかったからではないか？！
多くの対象としての患者としてモノのようにしか診ていなかったのではないか」



医師の「プロフェッションとしての責務」

その視点を共有しない**遺族側**から見れば「不誠実な行動の表象」として見えてしまうかもしれない

感情的に混乱した必死の状況、相手の感情や、自分の発言の受け止められ方など、どう受け止められるかまで配慮するゆとりなどない。

・・・医療メディエーターがいれば・・・

距離を置いた視点、「医師の真摯な意図」が患者側に誤解されていると気づくことになる。

メディエーターは、自身の評価を語るのではなく、常に「質問」により当事者に語ってもらう
自身の見解を語ると、患者側から見れば、
「この人も医師を庇っているだけ」と、信頼を失ってしまう。

意見を述べるのではなく、質問を發し当事者に語ってもらうなかで、
両者が齟齬の存在に気づき、情報共有がされるよう支援していく

・・・医療メディエーターにとって・・・

「問いを立てること」「質問を繰り返すこと」が、唯一の手段。
医師の医学的な説明は、正直なものでも、遺族の耳には入らない。

医師がどのように患者と向き合っていたか、遺族にも伝わっていくように支援していく

「他人事のように・・・。亡くなった患者をモノのように診ていた」といった
不信感と亀裂の拡大は防ぐことができる。

遺族に対してもつらい想いを受け止め、医師にも共有してもらい質問を通じ支援していく

